第３１号
令和元年（2019年）８月発行

支援員だより

発行者：山口県・公益財団法人山口県ひとづくり財団

もくじ

Ｐ１　支援員さんの声
Ｐ２　活動団体報告
Ｐ３　環境学習関連施設紹介
Ｐ４　自然保護課からのお知らせ

支援員さんの声

日々の支援員活動の中での思いや、感じたことなどをお寄せいただきました。ありがとうございました。

砂浜に見つかる小さな生物

自然観察指導員　松田　真紀子

今日もいつものように砂浜にやってきた。午前中とはいえ日差しが強い。浜を見渡すと海藻や海草、流木など多くの漂着物が打ち上がっている。ペットボトルなどの人工物は問題だけど、海藻など自然由来の漂着物が多く打ち上がっているくらいが見つかる生物の個体数も種類も多いように思う。

浜にしゃがみ込み、砂に半分埋まった大きな流木をゆっくり裏返して見る。周辺の砂は強い日差しで乾燥しているのに対し、流木の下は適度な湿り気が残されている。潜んでいたニホンタマワラジムシの集団がまるでクモの子を散らすように流木の裏を逃げ惑い、砂の上に落下した。これは海浜性のワラジムシで、姿は平たいダンゴムシという感じだ。同じく流木の下に潜んでいたハマベハサミムシが、砂に掘った巣穴の中をオロオロと歩き回っている。尻先のハサミの形から雌だと分かる。腹もふっくらしているからもしかして産卵を控えているのかもしれない。このハサミムシの仲間は子育てをする昆虫として知られている。産んだ卵にカビが生えないように卵を舐めたり、並べ替えたりするなどして甲斐甲斐しく世話をし、孵化した幼虫をしばし保護し外敵から守るのだ。因みに砂浜にはこのハマベハサミムシの他オオハサミムシも見つかる。そして岩礁や礫浜には海岸性のイソハサミムシが見つかる。少し観察してから乾燥してしまわないように流木を元の状態に戻した。

次に、波打ち際に打ち上がった海藻を裏返してみる。すぐに大量のハマトビムシ類が四方八方一斉に飛び跳ねた。その傍では砂の色そっくりなハマダンゴムシが慌てて丸くなり、ピンク色のイソミミズがウネウネ体をよじらせていた。これらの生物は漂着した海藻や魚介類、またそれに由来する砂の中の有機物などを食べる海辺のお掃除屋さんである。漂着海藻の下には他にもヒョウタンゴミムシやハネカクシ類など捕食性の昆虫なども多く集まる。こうして観察していると、砂浜の漂着物は海辺の生物にとって欠かせない大切な資源だと感じる。

砂の色そっくりなハマダンゴムシ

こんな感じが私の日常である。出掛けるのは砂浜だけでなく、岩礁や礫浜にも出かける。探す環境によって見つかる生物の種類が違うからだ。見つかる生物は多すぎて、私が種を同定できる生物はまだまだ極わずかだけど、文献で調べたり学芸員さんに教えて頂いたりしながら少しずつ調べている。

ヒョウタンゴミムシ

種名が分かったら生物のパネルを作成している。パネルには幼虫や生態写真などを加え、それぞれの魅力ができるだけ伝わるようにと作成している。現在までに昆虫やワラジムシ類など、海辺で見つかる節足動物49種、海浜植物44種のパネルを作成していて、これからも増やしていく予定だ。作成したパネルは、海辺の自然観察会で活用したり、時々展示したりしている。因みにこの生物パネルは豊田ホタルの里ミュージアムでテキスト化されている。また普段の観察から得られた情報の蓄積は豊田ホタルの里ミュージアム研究報告書に随時投稿させて頂いている。

これら海辺の生物たちは人目に付きにくい場所に潜んでいる種類が多いためか、一般には殆ど知られていない。たとえ目についたとしても気にも止められない様な地味で小さい生物ばかりだ。でもこうした気にも留められない様な小さな生物の多様さこそが海辺の豊かさを表しているのだと思う。

海辺の生物（節足動物）パネル

活動団体報告

山口市徳地の森を拠点に活動しておられる「もりとわ」さんに、取組を紹介していただきました。

徳地の森からはじまる人と森と地域の元気づくり

一般社団法人もりとわ　代表理事　岸本　由香里

山口市徳地の大原湖周辺 3,700ha の森林が、全国で初めて森林セラピー基地の認定を受けて今年で 13 年目になります。当法人は、2018 年に山口市徳地森林セラピー基地の推進主体として発足しました。「森林セラピー®」とは、科学的に解明された森林浴効果のことで、特定非営利活動法人森林セラピーソサエティが事業を所管し、現在は全国で 64 の基地やロードで活動が展開されています。山口市の森林セラピー事業においては、人と森と地域の元気づくりに貢献する取り組みとして、これまでに森の案内人の養成・育成、遊歩道等の環境整備をすすめています。その中にあって当法人は、市からの受託業務の中で、現地事務所の管理・運営及び、「森林セラピー山口」の活動全般のマネジメントを担当しています。活動を進めていく上で大切にしていることは、森林セラピーを **「ふかめる」「ひろげる」「つなげる」** こと。これらを実際の活動からご紹介したいと思います。

「ふかめる」 活動として、最も重要な活動は、森の案内人の会の活動支援です。森の案内人は、様々な団体・個人からの依頼によるガイド対応や、体験イベントを実施していますが、もとより、会員はボランティアベースの活動であり、その活動を支え合うためにグループとして成長していく支援が必要です。ひとりひとりの経験を全体で共有するため、各種ツールづくりや活動の情報共有を図っています。今年からは森の案内人養成講座の企画実施も担当することになり、新たな森の案内人の募集、講座運営のほか、森の案内人のフォローアップのための研修活動も行っていく予定です。順調にいけば、現在 85 名の森の案内人が、来年には約 100 名になる予定で、森の活動に新たな風を吹き込んでくれるものと期待しています。

「ひろげる」 活動として、最も力を入れているのが今年で 6 回目を数える「森フェス」の開催です。森林セラピー基地は市街地から離れていること、また単体では大規模な企画を行うことが難しいという背景がありました。この森フェスは、基地内の山口市・国立山口徳地青少年自然の家・森の案内人の会が実行委員会を構成し、当法人が実施企画の調整及び運営を担っています。森フェスは、毎回テーマを変え、参画主体の輪を広げると同時に新たな層への周知を図っています。またアンケートでニーズを掴み、企画をブラッシュアップし続けています。今年の春の開催では県内外から 50 を超える個人や団体が出展、合計 1,400 名の人が参加・参画し、森の魅力を発信しました。森フェスの特色は、森で遊び、森の心地よさに触れて、森や環境の大切さへ目を向けるきっかけになる体験型の企画が中心であること。今年の来場者のうち、約 6 割が 30 代・40 代のファミリー参加、約 1/3 が幼児から小学生までのお子様でした。子どもの自然離れが言われる中で、森フェスの開催を通じて、森や自然に親しむ子どもたちが増えているようで、喜ばしく感じています。

活動の最後の柱は **「つなげる」** です。森林セラピーは、森林での多様な活動のあり方を開いていくと考えています。昨年、国立山口徳地青少年自然の家を会場に「森×美腸メソッド～キレイに変わる 2 日間～」という宿泊型の講座を開催した際、参加者からたくさんの賛辞をいただきました。森では日常から距離を置いて、気持ちをリセットしたり、自然とのつながりを取り戻したり、人と人との交流の場としても役割を果たすことができる。そんな発見をすることができました。当法人の名称「もりとわ」には、森と「わ」…輪、和、環（人の輪、平和、環境など)、「とわ」…永遠、永続といった意味を込めています。森林セラピーを深め、広げ、そしてつなげて、各地域で活動される諸先輩方のように、活動を育んでいきたいと思っています。最後になりましたが、皆様方のご健康とご多幸を記念して結びとしたいと思います。ぜひ、山口市徳地森林セラピー基地へお越しください。

環境学習関連施設紹介

今年度第１回支援員研修会会場の「豊田ホタルの里ミュージアム」を紹介していただきました。

「ホタル」、「自然」、「人」のネットワークづくり

豊田ホタルの里ミュージアム　館長　増野　和幸

夏の風物詩・ホタルをモチーフにした当館は、ホタルを中心とした社会教育施設として、旧豊田町西市に 15 年前に設立されました。その後、下関市との合併を機にホタルを含めた自然史総合博物館として諸活動を展開しています。ゲンジボタルが舞う季節だけでなく、地域内外から多くの人が、一年を通じて来館しています。

《ホタルとの出会い》

地元の町は、今年で 52 回目のホタル祭りを開催しました。小学生たちは地域の方の協力を得ながら、ホタルの保護活動に継続して取り組んでいます。その中心となっているのがミュージアム。館内にはホタルの生態展示や産卵から孵化し成虫になるまでの説明のパネル、ホタルの行動に関する研究資料、ホタルと人との関わりなど、ホタルにまつわる情報が展示されています。幻想的に舞う木屋川のホタルを屋形船の上から撮影した映像など、視聴覚機器を効果的に使った展示もあります。この施設は子どもから大人、一般の方からホタルの研究者まで、幅広い人たちが利用する場となっています。

《自然との出会い》

当館では年間 30 回をこす観察会、夏休み中の連続講座、昆虫・植物・貝類などの教室、特別講演会などの普及・啓発活動を行っています。今年から「自然史の日」の名の下に、さまざまな自然領域の体験ブースを設ける機会を企画し、300 名を超える親子連れに楽しんでもらいました。身近なダンゴムシやタンポポからアンモナイト化石、星空の観望など、日ごろ見過ごしている自然や、滅多に接することのできない自然の不思議さとの出会いに、丁寧なガイド役をしています。化石やクモの研究者を招聘して、最先端の研究に耳を傾ける特別講演会もあり、毎回多くの方が参加しています。また、学芸員による小学校への出前講座や、地域内外からの講演要請にも対応しています。

《人との出会い》

ミュージアムには地域内だけでなく県内各地からの親子連れ、小中高校生たち、そして趣味的に動植物や化石を調べたり、カメラ撮影を楽しんだりする人など、さまざまな方法で自然に親しんでいる人たちが訪れています。この施設がそうした人たちの新たな出会いの場、交流の場にもなっています。

疑問や課題をいだいた人には、大学や研究機関に連絡をとってくれたり、専門家を紹介してくれたりもしています。

地方にある小さなミュージアムですが、日本で唯一のホタルを専門とした博物館というだけでなく、環境学習のための施設として、日々活動を展開しています。

「ホタル」と「自然」、そして「人」とがつながるネットワークづくりに、今後とも工夫をしながら取り組んでいきたいと考えています。

施設全体が
ホタルをモチーフ

野外に出ての
岩石教室

一般対象の
ホタルかご作り

希少野生動物種保護支援員研修会

次のとおり予定しています。（詳細は開催案内を参照）

第１回　日時：令和元年１１月１７日（日）10時～15時　場所：豊田ホタルの里ミュージアム　他

第２回　日時：令和２年　２月　９日（日）10時～15時　場所：岩国市錦町セツブンソウ自生地　他

発行元：（公財）山口県ひとづくり財団　県民学習部　環境学習推進センター
〒754-0893　山口市秋穂二島 1062
TEL 083-987-1110　FAX 083-987-1720
E-mail kankyo.c@hito21.jp　http://eco.pref.yamaguchi.lg.jp/learning/index.php

◆「レッドデータブックやまぐち2019」について

山口県では、絶滅のおそれのある野生動植物をとりまとめた「レッドデータブックやまぐち」の作成から10年以上が経過しており、県内の野生動植物をめぐる状況が大きく変動していることから、2015年からレッドリストの見直しを進め、2018年3月に「**山口県レッドリスト2018**」を作成しました。

また、山口県レッドリスト2018の掲載種について、生息状況等を解説した「**レッドデータブックやまぐち2019**」（web版）を作成し、2019年3月に公開しました。

○ レッドデータブックとは…

山口県内に生息・生育する野生生物について、専門家が生物学的観点から絶滅のおそれのある種を科学的・客観的に選定し、生息状況を明らかにした資料で、野生生物の保護対策のため、環境保全活動及び公共事業や各種開発における環境アセスメントなどに活用されます。

なお、レッドリストはレッドデータブックの基礎データです。

○ 掲載種数

「山口県レッドリスト2018」掲載種1,470種のうち、849種を掲載（各生物群において選定）

生物群	解説掲載種数	生物群	解説掲載種数
ほ乳類	21 (23)	昆虫類・クモ類	146(143)
鳥類	104(102)	陸・淡水産貝類	67 (40)
両生類・は虫類	16 (12)	維管束植物	426(320)
淡水産魚類	44 (20)	コケ植物	21 (28)
甲殻類等	4 (8)	合　計	849(696)

※括弧内は、レッドデータブックやまぐち(2002、貝類2003）の掲載種数

【参考】レッドデータブックやまぐち2019　　**注目される種の掲載例**

ペリカン目　トキ科
0200900300400
クロツラヘラサギ
Platalea minor Temminck & Schlegel, 1849

カテゴリ		
山口県	2018	VU
山口県	2002	VU
環境省	2019	EN

【執筆者：原田　量介】

形態・生態

全長740mm。顔は黒く、嘴は長いヘラ型で黒色。全身白色であるが、繁殖期には胸と後頭部に房状に換羽が伸び橙黄色になる。若鳥は嘴が翼の先が灰黒色で飛翔すると目立つ。低い小さな声でグググ、グェッと鳴く[20]。干潟や河口の濁った浅い水辺で、嘴をやや開き首を左右に振りながら餌を探し、嘴の間に入った餌を挟み取る。飛ぶときは浅く早い羽ばたきで、首と足を延ばして飛ぶ。韓国、北朝鮮、中国とロシア南部の島礁部で繁殖し、中国南部、香港、マカオ、台湾、ベトナム、日本などに渡り越冬する。日本の主な越冬地は九州、中国地方、沖縄。

生息・生育状況

冬鳥として河口の干潟や広い池沼に飛来する。1980年代には不定期的に1-2羽が飛来するまれな冬鳥であったが、徐々に増え始め山口湾では2009年頃から10羽を越えるようになり、2017年には31羽が越冬した。瀬戸内海側の河口での飛来が多く、県西部の厚狭川河口、木屋川河口も定期的な飛来地となっている。

提供：原田　量介(2018.3.30撮影)

選定理由

東アジアに生息し、世界での生息数は最大で3941羽[56]。近年、山口県での越冬数も増加傾向にあるが、開発により生息地の減少が懸念される。生息地の環境保全が必要。

減少等の要因

近年、増加傾向にあるが繁殖年齢は3-4年を要し、2002年に台湾でボツリヌス中毒による大量死など、何らかの問題が起こると激減する危険がある。

専用ウェブサイト及び県自然保護課ホームページで公開しています。

○「レッドデータブックやまぐち2019」ウェブサイト
【URL】https://eco.pref.yamaguchi.lg.jp/rdb/site/index.php

○山口県自然保護課ホームページ
【URL】https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cms/a15600/red/red.html